

日本語教科書の会話ディスコースと 明示的 (explicit)、暗示的 (implicit) な調整行動：教科書談話から学べる こと・学べないこと

宮崎 里司

キーワード

調整行動・明示的・暗示的・日本語教科書・会話ディスコース

1. 日本語教科書の談話を見直す

現在、日本語教科書¹で提示されている会話ディスコースは、はたして日本語習得を促進する役割を十分に果たしているであろうか。こうしたディスコースは、ティーチャートーク、フォリナートークなど同様に、調整された代表的な書きことばのまとめであるが、必ずしも、習得目的が明示化されているわけではない。筆者は、教科書会話が抱える問題に対し、強い懸念を抱く一人である。一般的に、教科書の編集者（言語管理を行う側）は、インターアクション能力の中でも、限定的な文法能力の習得への関心が高い。また、項目の提出順も、インプットが学習者の現在の中間言語レベルより一段階上のレベル ($i + 1$) である時、習得が促進されるという、Krashen (1985) のインプット仮説理論に基いて、デザイン化されているため、易から難へという「文法・文型積み上げ方式」が、シラバスに強く反映されている。

それでは、会話能力を習得するモデルとされるディスコースは、学習者の効果的な日本語習得に向けて、どのような点を考慮すべきであろうか。まず、言語調整の観点から、日本語教科書で採用されている会話の問題点を明らかにしたい。

- 1 依然として、日本語母語話者間（母語話者場面）の会話が多く採用されており、接触場面におけるインターアクション問題を解決するという意識が低い。
- 2 学習者には、いわゆる textbook Japanese として、中間言語の化石化を助長する場合があるが、その対策が講じられていない。
- 3 意味交渉 (negotiation of meaning) の研究成果が、教科書の会話ディスコースの作成に生かされていない。
- 4 接触場面の特徴である、ティーチャートーク、フォリナートーク、インターラングエー

- ジ・トークなどといったディスコースを、意識的に明示することに消極的である
- 5 Jefferson (1972) は会話の主な流れ (main sequence) から逸脱した、"side sequence" の中で起きる連続した調整行動に注目しているが、ほとんどの教科書は、調整のためのディスコースの重要性に気づいていない。具体的には、ほとんどの場合、インターアクション問題を解決するためのディスコース構成になっておらず、談話の参加者は、その課で新しく導入された語彙、文型にもかかわらず、コミュニケーションが示されていない問題。
 - 6 会話ディスコースでは、調整対象が、ほとんどの場合文法項目に限定され、非言語コミュニケーションや社会文化項目について無関心である。例として、聞き返しのストラテジー (Ozaki 1989) などを導入した談話もあるが、システムティックにアレンジされたものではなく、総じて恣意的であり、その課の重要なポイントとして位置づけられていない。
 - 7 一般的に、会話ディスコースは、「どのように生成すべきか」への関心は高いが、敬語回避のように、「どのように生成すべきではないか」といった観点がない。

上記のような問題に対し、これまでの談話分析やタイポロジー (類型論) 的なアプローチは、どの程度貢献してきたであろうか。言語管理理論の観点からみると、言語習得のプロセスは、ことばを生成するプロセスと、ことばを管理するプロセスに大別されるが、談話の管理プロセスについては、ほとんど関心が向けられていない。教科書で採用する会話には、こうした管理プロセスを明示的に教示できるディスコースが必要になる。

本稿は、これまでの調整ディスコースを、明示的 (explicit)、暗示的 (implicit) という観点から考察するとともに、日本語学習用教科書の中で、どのような調整行動が採用されているかを検証し、言語習得を目指した教科書会話は、どうあるべきかを提言する。

2. ディスコースを管理する調整行動

言語管理理論 (ネウストプニー 1995) は、接触場面で起こる言語問題を分析する理論的フレームワークとされる基本概念である。この理論において、管理プロセスは、規範の概念から始まり、a) 規範からの逸脱が起こったとき (逸脱)、b) 逸脱に参加者が気づいたとき (留意)、c) 気づかれた逸脱が否定的／肯定的に評価されたとき (評価)、d) 言語問題を調整、訂正しようとする何らかの行動が決められたとき (調整の選択)、e) その調整行動が実施されたとき (調整の遂行) という5段階によって構成されていると説明している。

生成されたディスコースを管理するプロセスでは、規範から逸脱した問題を解決するための調整行動が見られるが、そのプロセスについて、エスノメソドロジーの会話分析派は、会話の中で不適切さが起こった場合、それを処理する過程で現れる連続した調整パターンを指す、「調整軌道」(adjustment trajectories) という概念を提唱している (Schegloff et al. 1977)。この軌道のバリエーションは、参加者が、調整過程でどのような役割分担をす

るかによって決まる。言い換えれば、誰がその問題をマークし、調整のための発話行為を行うかということである。宮崎 (1998,1999; Miyazaki 2001,2002) では、このメカニズムは、話し手、聞き手、不適切さのマーク、それに調整のための発話行為という4つの要素によって構成され、誰が調整行動を行うかによって、自己調整タイプと他者調整タイプに分類されている。

自己調整タイプには、聞き手 (他者) が不適切さをマークし、話し手自身 (自己) が調整をデザインする、「他者マーク自己調整」型と、話し手自身が不適切さをマークし、調整のデザインをする、「自己マーク自己調整」型の2つがある。一方、他者調整タイプには、話し手自身が不適切さをマークし、聞き手が調整のデザインをする、「自己マーク他者調整」型と、話し手が調整行動に全く参加せず、聞き手 (他者) が不適切さをマークし、同時に聞き手 (他者) が調整をデザインする、「他者マーク他者調整」型の2つがある。なお、この他に、マークのみで調整ストラテジーが見られない、「他者マーク無調整」型と、「自己マーク無調整」型などといったタイプも考えられる。

調整軌道を動かす段階として、相手から調整行動を引き出す役割を果たすための引き金 (trigger)、または刺激となる調整マーカ (adjustment markers) が必要になる。前述の宮崎では、調整マーカ (adjustment markers) のバリエーションとして、相手の発話者に直接調整を要求する「調整リクエストマーカ」、不適切さはマークするが、直接調整の要求は行わない「不適切マーカ」、調整マーカは暗示的であるが、調整行動が行われたことをしめす「サポートマーカ」の3つを提唱しているが、このなかで、聞き返しのストラテジーは、「調整リクエストマーカ」の代表である。以下に具体的なディスコースを例示する。

例1 (NS: 日本語母語話者、FS: 日本語学習者)

- 1 NS: (中略) 日本は、もうほら、儲け主義に走ってるから。
- 2 FS: えもう?
- 3 NS: 儲け、要するに、お金を稼ぐ。
- 4 FS: ああ、そうですね。

(Miyazaki 1998 Chapter 3 Example1 より引用)

例1は、「他者マーク自己調整」型の調整軌道である。FSは、2で、「え、もう?」という、反復・説明要求を示す聞き返しのストラテジー (Request for Clarification: RC) を使い、話し手 (自己) が、聞き手 (他者) から調整を引き出すための調整リクエストとして機能し、3で、NSが「儲ける」ということばに言い換え、自己調整を行ったと分析できる。

一方、産出 (output) のための「調整リクエストマーカ」 (Request for Assistance: RA) タイプの調整が挙げられる。例1が、理解 (Comprehensible input) のためリクエストマーカであるとすれば、このマーカは、話し手 (自己) が、聞き手 (他者) から調整を引き出すために機能し、理解可能な産出 (Comprehensible output, Swain 1985) のためのリクエストマーカであるといえる。なお、このストラテジーは、アピールと呼

ばれるコミュニケーション・ストラテジー (Tarone, Cohen and Drumas 1983) の一つである。この調整軌道は、話し手自身が、規範の逸脱を留意し、その問題解決として、聞き手に調整を依頼する、「自己マーク他者調整」型であると特徴付けられる。

例 2

- 1 FS: ええっと、牧場でキャンプと、じょうぶ?、じょうぶ?
- 2 NS: 乗馬。
- 3 FS: 乗馬、乗馬。

(Miyazaki 1998 Chapter 4 Example 3)

例 2 で、FS は、horse riding (乗馬) を、「じょうば」と発音すべきか、「じょうぶ」というべきかで迷っていたため、正確な産出のために、上昇イントネーションで、NS にチェックを求めたことがフォローアップ・インタビューによって明らかになった。この場合、この上昇イントネーションが、RA の役割を果たしたと判断できる。

不適切マーカ―は、問題が発生したというシグナルを出す旗 (フラッグ) のような役割を果たすが、不完全発話、間投語、問題が発生した箇所の繰り返し、ポーズ、またはこれらの組み合わせなどとなって現れる。

例 3

- 1 NS: お子さんはいらっしゃいますか。
- 2 FS: はい。
- 3 NS: 何人?
- 4 FS: うん、あの、ああ、いち、いちい。
- 5 NS: 一人。
- 6 FS: 一人です。

(Miyazaki 1998 Chapter 4 Example 15 より引用)

FS は、4 で、調整行動を引き出す機能を果たすが、要求行動が常に明らかではない場合もある。直接調整を引き出す調整リクエストとしての発話意図を伝達できないため、調整を求める直接的な引き金にならないことが多い。不適切マーカ―による発話行為が成功するかどうかは、次の発話者がそうした発話行為をどの程度理解し、「訂正フィードバック (corrective feedback)」(Gass and Varonis 1985) を行うかによる。つまり、発話意図が十分に汲み取られない場合、調整リクエストマーカ―を使った、「自己マーク他者調整」型と比べ、調整行動は失敗に終わる可能性が高いので、効果的ではないといえる。

また、「サポートマーカ―」は、コミュニケーション問題が起きた場合でも、side-sequence での調整行動を行わず、聞き手 (主に母語話者) の、留意、評価、調整の行動によって、調整ディスコースを、できるだけ最小化しようという意識が働くマーカ―である。このディスコースには、調整行動の引き出し役が存在せず、「他者マーク他者調整」

に分類できる。サポートマーカーの場合、不適切な発話を行った発話者自身は、問題があったことに気づかず、相手の発話者が直接調整を行うことで、結果的に問題があったことを知らせる役割があり、ティーチャートークの特徴として、不適切さをよりの確に類推できる教師によって、教室場面で使われる頻度が高い。第二言語習得研究 (SLA) では、recasts (言い直し) と呼ばれる意味交渉ストラテジーの一種で、主に母語話者による、特徴的な接触場面ディスコースの一つである。聞き手である参加者が、規範からの逸脱は留意するものの、敢えて明示化せず、自らのターン・ティキングの中で調整行動を完結することで、main sequence を維持するストラテジーを採用する。ただし、この場合、聞き返しなどの問題確認行動を必要としない逸脱で、高い確率で問題解決できることが前提となっている。

例 4

- 1 FS: い、いちが、一月にメルボルンに行きました
- 2 NS: 来ました

(Miyazaki 1998 Chapter 7 Example 1)

NS は、FS の発話「行きました」に対し、明らかに不適切な発話というラベルを貼り、しかも相手に確認せずに調整できると判断したため、「来ました」と直接調整したと述べたことが、フォローアップ・インタビューによって明らかになった。Doughty and Varela (1998) は、クラスルーム場面で検証した recasts を含むディスコース分析の結果、recasts では、1. 逸脱した部分を、上昇イントネーションで強調しながら繰り返しシグナルを送る。2. 学習者が (そのシグナルに気付かず) 逸脱の調整をしない場合、調整箇所を強調しながら、下降イントネーションで、調整された形式を含む recasts を発話することで、逸脱したものと対比させる、というプロセスを経ると説明している。

以上、主な 4 つの調整タイプ (他者マーク自己調整、自己マーク自己調整、自己マーク他者調整、他者マーク他者調整) を取り上げてきたが、下位分類として、「他者マーク無調整」、「自己マーク無調整」も考えられる。これは、発話者自身も、聞き手である他者も、全く調整のための発話行為に参加しない場合である。会話の流れから見ると、side-sequence には入らず、実質的な会話が続く形になり、コミュニケーション問題は、ディスコースの表層部分には現れないが、参加者によって、問題は留意されている。発話が未完成のまま終了したり、問題があった場合でも、参加者が調整行動を起こさない場合などが、これらのタイプに該当する。

では、上記で取り上げた調整パターンは、どのようにデザインされるのであろうか。ハイムズ型モデルをアレンジした、ニューストプニーのコミュニケーションモデルを参考にすると、調整フレーム (調整の回数) と、参加者ネットワーク (参加人数) が考えられるが、フレームの観点からは、一回だけの調整を「単純調整」(single adjustment)、連続した調整行動を「複合調整」(complex adjustment) と呼ぶことにする (宮崎 1998, 1999; Miyazaki 2000, 2001)。ただし、ディスコースの中に複数の調整行動が確認されても、それ

が複合調整になるとは限らない。あくまでも一つの問題（規範からの逸脱）について、複数回の調整行動が行われる場合に限って複合調整とラベル化する。調整行動に参加するネットワークの観点からは、一人による調整と、発話者自身と聞き手が一人ずつ参加する調整（dyadic or two-party adjustment）、3人以上が参加する、マルチ参加者調整（multi-party adjustment）に分類できる。なお、マルチ参加者調整には、通常、2人の参加者による調整行動では見られない特徴的な調整ストラテジー（仲介調整）が現れることが明らかになっている（宮崎 1990）。

では、こうしたディスコースを管理する調整行動は、どの程度明示的に学習者に提示されているのであろうか。次節では、明示的、暗示的という観点から考察を続ける。

3. 明示的な調整・暗示的な調整

最近の SLA 理論では、インストラクションのタイプの分類に関連して、学習者が言語形式と意味／機能を結びつけるマッピングプロセスに関心が高まっている。Communicative competence のうち、とくに正確さと流暢さの両面において、学習者のニーズ分析といった関心は薄いものの、目標言語に漬け浸すためのタスクを処理する際の初期設定処理モードを構成する、Focus on Meaning や、学習のための特定な文法構造に特化し、マッピングに必要な処理モードを行う、Focus on Forms ではなく、言語形式と意味（または内容）／機能を統合して同時処理し、タスクの意義、形式の自然さ、学習者のニーズ分析、中間言語の限定性などを考慮する作業モードである、Focus on Form が習得に有効であると主張されている（Norris and Ortega 2000, 小柳 2005）。しかしながら「形式と意味」および「機能」の統合化を図るうえで、「形式と意味」の逸脱を、どのように管理し、調整していくかといった注目度は依然として低い。今後は、形式と意味を生成する過程で起きた問題を調整しながら、接触場面で正しく機能させる重要性を意識化させていくことが肝要であろう。さらに、インターアクション能力の習得を目指す調整能力の重要性に注目するため、形式、意味（または内容）や機能に加え、調整能力への焦点化（Focus on interactive adjustment）といった概念の提唱が望まれる。

第2節では、ディスコースを管理する調整行動に基づく、いくつかの調整軌道を取り上げた。こうした軌道は、日本語教科書を編集するにあたり、モデル会話の中に取り入れる必要がある。そのためには、学習者に調整軌道を意識化させる必要があるが、はたして、これらの調整行動が明示的に提示できるか、という問題がある。ここでは、それぞれの調整軌道が、明示的、暗示的といった分類に分けられるかを考察する。

第二言語知識は、言語学的分析に基づき説明できる、明示的（顕在的）知識（explicit L2 knowledge）と、暗示的（陰在的）知識（implicit L2 knowledge）に分けられるとされる。Ellis (2004) は、明示的な知識について、「言語および言語がどのような配置が可能かの方法についての（意識的な）知識」（Ellis 2004: 229（ ）は筆者の加筆）であると定義し、暗示的な知識は、それとは逆の概念であると主張している。また、Krashen (1981)

は、明示的知識は、学習 (learned) された知識であり、習得された知識とされる、暗示的な知識とは別のものであり、明示的な知識は、暗示的知識から引き出されたアウトプットをモニターすることが可能なだけであると捉えている。さらに、明示的な学習の結果は、決して暗示的な (つまり習得された) 知識に導かれないという立場を表明している。また、認知心理学の観点から、習得は、宣言的知識 (declarative knowledge) と手続き的知識 (procedural knowledge) の双方に関わると予想される (Ellis 1999: 234) が、明示的知識と暗示的知識との組み合わせにより、習得度が異なるとされている。

これら implicit 及び explicit という二つの知識の関連性について、明示的な知識と暗示的な知識は、相互に関連しあいながら、変化しあうという立場を取る、interface position という立場と、明示的な知識を増やしても、必ずしも暗示的で、無意識的な知識にはならないという non-interface position という立場があり、Krashen の Learning-Acquisition Hypothesis (学習・習得仮説) は、後者を強く支持するとされている。また、長友は、interface position の立場を支持しつつも、対立する二分類的捉え方ではなく、unified interface という概念を提唱している (長友 1996) が、むしろ、筆者は、interface, non-interface といった単純な二項分類にこそ問題があると捉えている。宮崎 (1991) の敬語使用の実証研究では、「敬語を要求する述部を使わない」、「敬語を要求する述部を使う」、「低い敬語の述部を使う」、「センテンスの密着度を増す (後続敬語の回避)」などといった回避ストラテジーの重要性を指摘し、「外国人の敬語習得の問題は、どのように敬語を生成するかと同時に、どのように使わないのかにも留意する必要がある」ことを実証した。また、調査対象者の明示的な敬語知識が、必ずしも、敬語回避ストラテジーの習得に役立つわけではないという作業仮説を提示したが、回避ストラテジーの習得は、代表的な言語管理者である、教師、学習者のいずれも意識に上らない項目であり、管理者が存在しない、自然習得下の環境²での習得と結論付けざるをえない。

こうした点を総合した場合、明示的な敬語生成システムを習得しても、必ずしも暗示的な敬語回避能力の習得には結びつかないという、non-interface な立場が優位のように思われるが、教師管理、学習者管理下の習得は、explicit knowledge が、implicit knowledge に変容していくという立場を支持しないと説明がつかない。むしろ、「明示的な知識を増やしても、必ずしも暗示的な知識の増加に結びつくわけではないが、暗示的知識を習得する環境設定の構築に役立つ」という捉え方が妥当ではないだろうか。

調整行動も、明示的であると同時に教示的なパターンと、なかなか学習者や教師の意識に上らず、教室での学習項目としてデザイン化されにくいものがある。「調整リクエストマーカー」を使った調整パターンである、「他者マーク自己調整」型と、リクエストマーカーを応用した「自己マーク他者調整」型は明示的調整と位置づけられている。一方、暗示的調整ディスコースとしては、「不適切マーカー」を使った「自己マーク他者調整」型、「サポートマーカー」を使った、「他者マーク他者調整」型、さらに調整参加者が発話者のみの「自己マーク自己調整」型などが挙げられる。加えて、マークのみで調整ストラテジーが見られない、「他者マーク無調整」型と、「自己マーク無調整」型などは、マーク自体暗示的なディスコース・パターンであると判断できる。

前節で取り上げた、「他者マーク他者調整」型である recasts は、現在の SLA 研究対象項目では、corrective feedback のうち、暗示的な implicit negative feedback に分類できる。10 人の英語母語話者 (NS) と 10 人の日本語母語話者 (NNS) を組み合わせた、NS-NNS による意味交渉ディスコースを分析した Braidı (2002) の実証研究によると、① 意味交渉のないインターアクション、② 1 回だけの調整マーカ (論文では one-signal negotiations) を含む意味交渉、③ 複合調整 (論文では extended negotiations) に分類した場合、「他者マーク他者調整」である recasts の出現率は、① (2.77%)、② (8.72%)、③ (10.56%) の順に増加したことが明らかになった。さらに、ディスコースに含まれたコミュニケーション問題 (論文では grammatical error) が、一つの場合には、recasts が 13.8% だが、複数のエラーの場合には、17.41% になることが判明した。ただし、recasts の対象項目を、この論文で指摘されたような文法項目だけに限定すべきではない。Braidı は、recasts に関して、「学習者が非文法的な発話をしたことを、(他の参加者が) 否定的に捉える暗示的な証」(Braidı 2002: 6 () は筆者の加筆) と記述しているが、当然ながら、社会言語学的、社会文化的な規範の逸脱に対しても、暗示的な調整が選択される場合があると予想される。加えて、上級学習者は、その他の学習者に比べ、明示的な調整行動を提供される機会は少ないものの、接触場面のインターアクションの過程の中で、母語話者から、暗示的、陰在的な調整行動を受ける可能性がある。また、上級話者も、頻繁に「自己マーク自己調整」型調整行動を行うことも予想される。さらに、「他者マーク無調整」型調整行動、「自己マーク無調整」型は、調整行動そのものが存在せず、言語管理プロセスでは、規範の逸脱を留意し、プラス評価、マイナス評価する段階で終わり、直接の調整ストラテジーの選択プロセスに進まない軌道もありうる。

第二言語習得では、Implicit negative feedback は、調整行動が選択された時点以降の現象のみに焦点を当てているが、逸脱、留意、調整マーカといった、フィードバック以前のプロセスにも注目し、調整軌道の観点から、より広く考察する必要がある。これに関して、Lyster (1998) は、corrective feedback の観点から、recasts はそれほど有意義とは評価できないが、教師が、教室場面で、形式よりも内容に注目させることにより、クラスを進行させられる点においては意義がある、と述べている。しかしながら、視点をさらに広げ、教室場面以外の社会的文脈のある接触場面では、母語話者によって、頻繁に応用される調整行動であり、フォリナートークの特徴の一つにもなっていることに留意すべきである。教室場面以外では、母語話者がどのような調整行動を使うのか、Recasts を社会文脈的な観点から捉えなおす研究指向が望まれる。また、Recasts は、現象の存在を認識させるだけでなく、学習者のエラーが化石化するのを避けるためにも、調整行動の一つとして教室場面で意識化させなければならない。

4. 教科書談話で採用される調整行動

では、これまでの調整パターンは、日本語教科書の会話ディスコースで、どの程度採用されているのであろうか。Miyazaki (2000) では、聞き返しを使った、「他者マーク自己調整」型調整ディスコースが、日本語教科書の中で、どの程度採用されているかを検証し

たが、採用率が低かったことが明らかになった。これを基に、本稿では、さらに主な調整ディスコース・パターンに拡大した実証研究をデザインした。

4.1 調査概要

基礎資料となったデータは、1999年9月の時点で、国際交流基金日本語国際センターの図書館に保管され、国内外で採用されている日本語教科書のうち、会話ディスコースが含まれた、ほとんど全ての教科書を、都内の日本語教育関連大学院の修士課程に在籍する3名のリサーチアシスタントによって収集された資料に基づいている。アシスタントには、調整タイプ・調整デザインの概念について、調査者が事前に説明をし、調整ディスコースを一つずつ確認しながら、資料1に示すようなカバーシートに書いてもらった。調整デザインのフレームネットワークの1.1は、調整行動が一度しか現れない単純調整、2.2は、2度以上現れる複合調整を指す。また、2.1は、二者間で行われる調整行動、2.2は、3人以上の間で行われる、マルチ参加者調整である。データ収集の結果を、調整ディスコースのパターン別に、以下1-4にまとめる。

表1 教科書会話ディスコース分析(他者マーク自己調整)

No.	教科書名	著者	出版社
F1-1	日本語 KAIWABOOK 初級1 (Conversao em Japonês)	Akiko Kurihara Watanabe/Alice Sanae Tsuchiya/Yosikumi Shirai	仁恕学院
F1-2	横山さんの日本語 6	日本語教育センター	日本語教育センター
F1-3	横山さんの日本語 5	日本語教育センター	日本語教育センター
F1-4	新編高級日本語会話	松下孝子・叶藤	清音大学出版社
F1-5	新編高級日本語会話	松下孝子・叶藤	清音大学出版社
F1-6	ナレズワフ大学日本語会話	今井純子・中村妙子・ハラニフソソ	ナレズワフ大学人文社会科学部日本語科
F1-7	ナレズワフ大学日本語会話	今井純子・中村妙子・ハラニフソソ	ナレズワフ大学人文社会科学部日本語科
F1-8	見て、きいて、わかる実践日本語会話	横山信子	三修社
F1-9	見て、きいて、わかる実践日本語会話	横山信子	三修社
F1-10	長沼新現代日本語 I	言語文化研究所	言語文化研究所
F1-11	長沼新現代日本語 I	言語文化研究所	言語文化研究所
F1-12	長沼新現代日本語 II	言語文化研究所	言語文化研究所
F1-13	生活日本語	文化庁	文化庁
F1-14	生活日本語	文化庁	文化庁
F1-15	日本語でビジネス会話初級編:生活とビジネス	日米会話学院日本語研修所	凡人社
F1-16	日本語でビジネス会話初級編:生活とビジネス	日米会話学院日本語研修所	凡人社
F1-17	A COURSE IN MODERN JAPANESE VOLUME ONE	大坪一夫、藤原雅彦、水谷修 他	名古屋大学出版会
F1-18	A COURSE IN MODERN JAPANESE VOLUME ONE	大坪一夫、藤原雅彦、水谷修 他	名古屋大学出版会
F1-19	日本語でビジネス会話初級編:生活とビジネス	日米会話学院日本語研修所	凡人社
F1-20	日本語会話中級 I	高柳和子、遠藤裕子、袴田陽子 他	凡人社
F1-21	日本語会話中級 I	高柳和子、遠藤裕子、袴田陽子 他	凡人社
F1-22	日本語会話中級 I	高柳和子、遠藤裕子、袴田陽子 他	凡人社
F1-23	日本語会話中級 I	高柳和子、遠藤裕子、袴田陽子 他	凡人社
F1-24	日本語会話中級 I	高柳和子、遠藤裕子、袴田陽子 他	凡人社
F1-25	Communication Japanese Style III 長沼集中日本語コース中級前期	言語文化研究所	言語文化研究所
F1-26	Communication Japanese Style III	言語文化研究所	言語文化研究所
F1-27	Communication Japanese Style III	言語文化研究所	言語文化研究所
F1-28	Communication Japanese Style III	言語文化研究所	言語文化研究所
F1-29	留学生の日本語会話	国際学友会日本語学校	
F1-30	留学生の日本語会話	国際学友会日本語学校	
F1-31	留学生の日本語会話	国際学友会日本語学校	
F1-32	留学生の日本語会話	国際学友会日本語学校	
F1-33	留学生の日本語会話	国際学友会日本語学校	
F1-34	コミュニケーションの為の日本語入門	能登博義	SOTAKUSHA (創拓社)
F1-35	日本語を話そう 15 のテーマで学ぶ日本事情	日鉄ヒューマンでデベロップメント / 日本外国語専門学校	The Japan Times
F1-36	日本語入門 はじめのいっほ First Steps in Japanese	谷口すみ子、萬浪絵理、榎子あゆみ、萩原弘毅	スリーネットワーク
F1-37	日本語入門 はじめのいっほ First Steps in Japanese	谷口すみ子、萬浪絵理、榎子あゆみ、萩原弘毅	スリーネットワーク
F1-38	日本語入門 はじめのいっほ First Steps in Japanese	谷口すみ子、萬浪絵理、榎子あゆみ、萩原弘毅	スリーネットワーク
F1-39	日本語入門 はじめのいっほ First Steps in Japanese	谷口すみ子、萬浪絵理、榎子あゆみ、萩原弘毅	スリーネットワーク
F1-40	日本語入門 はじめのいっほ First Steps in Japanese	谷口すみ子、萬浪絵理、榎子あゆみ、萩原弘毅	スリーネットワーク
F1-41	日本語入門 はじめのいっほ First Steps in Japanese	谷口すみ子、萬浪絵理、榎子あゆみ、萩原弘毅	スリーネットワーク
F1-42	日本語入門 はじめのいっほ First Steps in Japanese	谷口すみ子、萬浪絵理、榎子あゆみ、萩原弘毅	スリーネットワーク
F1-43	日本語入門 はじめのいっほ First Steps in Japanese	谷口すみ子、萬浪絵理、榎子あゆみ、萩原弘毅	スリーネットワーク
F1-44	初級日本語テキスト 日本語で話そう③人間関係とコミュニケーション	高柳和子、広瀬万里子、石崎晶子	財団法人英語教育協議会 (ELEC)
F1-45	初級日本語テキスト 日本語で話そう③人間関係とコミュニケーション	高柳和子、広瀬万里子、石崎晶子	財団法人英語教育協議会 (ELEC)
F1-46	日本語-はじめまして-	東京外国語専門学校 日本語科 初級教材編集委員	(発行) 東京外国語専門学校 (発売) 凡人社
F1-47	日本語 KAIWABOOK 初級3 (Conversacao em Japonês ETAPA3)	Akiko Kurihara Watanabe, Alice Sanae Tsuchiya/Yosikumi Shirai	Junjo Instituto Cultural (仁恕学院)
F1-48	Japanese for JETs Intermediate		(財)自治体国際化協会
F1-49	初級日本語かわ	東京外国語大学 留学生日本語教育センター	凡人社
F1-50	初級日本語かわ	東京外国語大学 留学生日本語教育センター	凡人社
F1-51	ロールプレイで学ぶ会話 (1) こんにちはと何と言いますか	岡崎志津子、小西正子、藤野萬子、松井裕子、松永雅子	凡人社
F1-52	なめらか日本語会話	富飯容子	(株)アルク
F1-53	なめらか日本語会話	富飯容子	(株)アルク
F1-54	Japanese for beginners in 25 Situations - ながめ 25 -	言語文化研究所	言語文化研究所
F1-55	Japanese for beginners in 25 Situations - ながめ 25 -	言語文化研究所	言語文化研究所
F1-56	Japanese for beginners in 25 Situations - ながめ 25 -	言語文化研究所	言語文化研究所
F1-57	Japanese for beginners in 25 Situations - ながめ 25 -	言語文化研究所	言語文化研究所
F1-58	ヤングのための日本語 I JAPANESE FOR YOUNG PEOPLE I	国際日本語普及協会	講談社インターナショナル
F1-59	ヤングのための日本語 II JAPANESE FOR YOUNG PEOPLE II	国際日本語普及協会	講談社インターナショナル
F1-60	日本でくらす人の日本語 I	大谷まこと、関恵美子、田中和佳子 他	にはんごの会 企業組合
F1-61	日本でくらす人の日本語 I	大谷まこと、関恵美子、田中和佳子 他	にはんごの会 企業組合
F1-62	日本でくらす人の日本語 I	大谷まこと、関恵美子、田中和佳子 他	にはんごの会 企業組合
F1-63	SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Volume One: DRILLS	筑波ランゲージグループ	凡人社
F1-64	SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Volume One: DRILLS	筑波ランゲージグループ	凡人社
F1-65	SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Volume One: DRILLS	筑波ランゲージグループ	凡人社
F1-66	SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Volume One: DRILLS	筑波ランゲージグループ	凡人社
F1-67	SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Volume One: DRILLS	筑波ランゲージグループ	凡人社
F1-68	JAPANESE FOR EVERYONE	長柄 他	学研
F1-69	JAPANESE FOR EVERYONE	長柄 他	学研
F1-70	JAPANESE FOR EVERYONE	長柄 他	学研
F1-71	JAPANESE FOR EVERYONE	長柄 他	学研
F1-72	JAPANESE FOR EVERYONE	長柄 他	学研
F1-73	JAPANESE FOR EVERYONE	長柄 他	学研
F1-74	インタラクティブ・ジャパニーズ 1 INTERACTIVE JAPANESE 1	友田多香子 プライアン・メイ	講談社インターナショナル
F1-75	インタラクティブ・ジャパニーズ 1 INTERACTIVE JAPANESE 1	友田多香子 プライアン・メイ	講談社インターナショナル
F1-76	インタラクティブ・ジャパニーズ 1 INTERACTIVE JAPANESE 1	友田多香子 プライアン・メイ	講談社インターナショナル
F1-77	Communicating in Japanese コミュニケーションのための日本語入門	能登博義	創拓社
F1-78	Communicating in Japanese コミュニケーションのための日本語入門	能登博義	創拓社
F1-79	Communicating in Japanese コミュニケーションのための日本語入門	能登博義	創拓社
F1-80	Communicating in Japanese コミュニケーションのための日本語入門	能登博義	創拓社
F1-81	Communicating in Japanese コミュニケーションのための日本語入門	能登博義	創拓社
F1-82	Communicating in Japanese コミュニケーションのための日本語入門	能登博義	創拓社
F1-83	Communicating in Japanese コミュニケーションのための日本語入門	能登博義	創拓社
F1-84	ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE: INTERCULTURAL COMMUNICATION volume one 初級実践日本語1	日暮嘉子	アルク
F1-85	ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE: INTERCULTURAL COMMUNICATION volume one 初級実践日本語1	日暮嘉子	アルク
F1-86	ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE: INTERCULTURAL COMMUNICATION volume one 初級実践日本語1	日暮嘉子	アルク
F1-87	ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE: INTERCULTURAL COMMUNICATION volume one 初級実践日本語1	日暮嘉子	アルク
F1-88	ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE: INTERCULTURAL COMMUNICATION volume Two 初級実践日本語2	日暮嘉子	アルク
F1-89	ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE: INTERCULTURAL COMMUNICATION volume Two 初級実践日本語2	日暮嘉子	アルク
F1-90	ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE: INTERCULTURAL COMMUNICATION volume Two 初級実践日本語2	日暮嘉子	アルク
F1-91	CRASH COURSE JAPANESE BUSINESS ビジネス日本語学習コース	清 ルミ	アルク
F1-92	CRASH COURSE JAPANESE BUSINESS ビジネス日本語学習コース	清 ルミ	アルク
F1-93	CRASH COURSE JAPANESE BUSINESS ビジネス日本語学習コース	清 ルミ	アルク

日本語教科書の会話ディスコースと明示的 (explicit)、暗示的 (implicit) な調整行動：
教科書談話から学べること・学べないこと

出版年	版	頁	調整		No.	メモ
			1 フレーム	2 ネットワーク		
1995		33	1・1	2・1	f1-1	
1989	初	53,58	1・1	2・1	f1-2	
1989	初	74	1・1	2・1	f1-3	
1998	初	94,95	不明	不明	f1-4	
1998	初	87	1・1	2・1	f1-5	
1997	初	21	1・2	2・1	f1-6	
1997	初	59	1・1	2・1	f1-7	
1992	初	59	1・1	2・1	f1-8	接触場面
1992	初	88	1・1	2・1	f1-9	
1988	1991 版	pp.69	1・2	2・1	f1-10	初級前期用教科書
1991		pp.96	1・1	2・1	f1-11	初級前期用教科書
1991		pp.109	1・1	2・1	f1-12	たぶん NNS-NNS
1983		pp.159	1・2	2・1	f1-13	中国からの帰国者の為のテキスト
1983		pp.197	1・1	2・1	f1-14	帰国者の為のテキスト
1989		pp.149	1・1	2・1	f1-15	
1989		pp.61	1・1	2・1	f1-16	形を練習する上で、「～てください」の形を実用的に理解させるために調整ディスコースが使われた。
1983		pp.287	1・1	2・1	f1-17	
1983		pp.289	1・2	2・1	f1-18	
1989		pp.141	1・1	2・1	f1-19	
1993		pp.113	1・1	2・1	f1-20	
1993		pp.85	1・1	2・1	f1-21	
1993		pp.87	1・1	2・1	f1-22	
1993		pp.18	1・2	2・1	f1-23	
1993		pp.18	1・2	2・1	f1-24	
1989		pp.2	1・1	2・1	f1-25	中級前期の教科書
1989		pp.5	1・1	2・1	f1-26	中級前期の教科書
1989		pp.9	1・1	2・1	f1-27	
1989		pp.21	1・2	2・1	f1-28	中級後期教科書
1994	3 版	pp.44	1・1	2・1	f1-29	
1994	3 版	pp.112	1・1	2・1	f1-30	
1994	3 版	pp.76	1・1	2・1	f1-31	
1994	3 版	pp.120	1・1	2・1	f1-32	
1994	3 版	pp.152	1・1	2・1	f1-33	
1992	初	pp.10	1・1	2・1	f1-34	
1994	初	pp.12	1・1	2・2	f1-35	接触場面、NNS「お見合い」がわからず RC。
1995	初	pp.152	1・1	2・1	f1-36	接触場面、NNS「熱」がわからなかった。調整はアクションで。
1995	初	pp.33	1・1 × 2 回	2・1	f1-37	接触場面、NNS「お国」がわからず RC。調整は例示で相手の無言（他者マーク）を受けて自己調整。
1995	初	pp.66	1・1	2・1	f1-38	接触場面、NNS「結婚式」がわからなかった。調整は英語で。
1995	初	pp.32	1・1 × 2 回	2・1	f1-39	接触場面、NS が NNS の名前を聞き取れなかった。NNS が NS の名前を聞き取れなかった。
1995	初	pp.98	1・1	2・1	f1-40	接触場面、NS が NNS の発話を聞き取れなかった。
1995	初	pp.99	1・2	2・1	f1-41	接触場面、NNS「止りません」「各駅」がわからなかった。
1995	初	pp.111	1・1	2・1	f1-42	接触場面、NNS「アルタ」が聞き取れなかった。
1995	初	pp.146	1・1	2・1	f1-43	接触場面、NNS「禁煙」の意味がわからず英語で RC。
1991	初	pp.78	1・1	2・2	f1-44	接触場面、NNS「えだまめ」がわからなかった（聞き取れなかった）。
1991	初	pp.102	1・1	2・1	f1-45	接触場面、NNS「商品券」を知らなかったため、聞き取れなかった。
1994	初	pp.104	1・2	2・1	f1-46	接触場面、NS「かつお節だしをとる」→ NNS: RC → NS: 自己調整+「かつお節は魚で作ります。」(自・自)
1995	初版	pp.29	1・1	2・1	f1-47	接触場面、NNS が言っている食材がわからなかった。
1995	初版	pp.62	1・1	2・1	f1-48	接触場面、NNS「自費」がわからず RC。
1995	新装版	pp.867	1・1	2・1	f1-49	接触場面、NNS「民権」がわからず RC。
1995	新装版	pp.131	1・1	2・1	f1-50	接触場面、NNS「密下ろし」がわからず RC。
1987	初?	p.150,151	1・1	2・1	f1-51	「コミュニケーションギャップが生じた時」というタイトルで、まとめて提示、ダイアログではない。
1997	初?	pp.34	1・1	2・1	f1-52	NS-NS のディスコース。
1997	初?	pp.34	1・1	2・1	f1-53	NS-NS のディスコース。
1999	初	p13	1・1	2・1	f1-54	接触場面
1999	初	p36	1・1	2・1	f1-55	接触場面
1999	初	p106	1・1	2・1	f1-56	接触場面
1999	初	p144	1・1	2・1	f1-57	接触場面
1998	初	p23	1・1	2・1	f1-58	接触場面
1998	初	p92	1・1	2・1	f1-59	接触場面
1997	初	p24	1・1	2・1	f1-60	接触場面
1997	初	p34	1・1	2・1	f1-61	接触場面
1997	初	p184	1・1	2・1	f1-62	接触場面
1991	初	p38	1・1	2・1	f1-63	接触場面と思われる
1991	初	p86	1・1	2・1	f1-64	接触場面
1991	初	p102	1・2	2・1	f1-65	接触場面・ドリルの会話
1991	初	p103	1・2	2・1	f1-66	接触場面
1991	初	p148	1・1	2・1	f1-67	接触場面と思われる
1990	初	p5	1・2	2・1	f1-68	接触場面
1990	初	p144	1・2	2・1	f1-69	接触場面
1990	初	p232	1・1	2・1	f1-70	接触場面
1990	初	p232	1・1	2・1	f1-71	接触場面
1990	初	p233	1・1	2・1	f1-72	接触場面
1990	初	p259	1・1	2・1	f1-73	接触場面
1996	初	p52	1・1	2・1	f1-74	接触場面・単純調整の他自調整が2個所ある。
1996	初	p53	1・1	2・1	f1-75	接触場面
1996	初	p227	1・1	2・1	f1-76	接触場面
1992	初	p18	1・1	2・1	f1-77	接触場面
1992	初	p76	1・1	2・1	f1-78	接触場面
1992	初	p48	1・1	2・1	f1-79	接触場面
1992	初	p120	1・1	2・1	f1-80	接触場面
1992	初	p184	1・2	2・1	f1-81	接触場面
1992	初	p406	1・1	2・1	f1-82	接触場面と思われる。
1992	初	p406	1・1	2・1	f1-83	接触場面
1998	初	p78	1・1	2・1	f1-84	接触場面
1998	初	p116	1・1	2・1	f1-85	接触場面
1998	初	p354	1・1	2・1	f1-86	接触場面
1998	初	p355	1・2	2・1	f1-87	接触場面
1999	初	p83	1・1	2・1	f1-88	接触場面ではない
1999	初	p208	1・1	2・1	f1-89	接触場面
1999	初	p286	1・1	2・1	f1-90	接触場面
1994	初	p60	1・1	2・1	f1-91	接触場面・RC のみ。調整部分はダイアログにはない。
1994	初	p75	1・2	2・1	f1-92	接触場面
1994	初	p83	1・1	2・1	f1-93	接触場面・調整部分はノンバーバル

表2 教科書会話テキストコース分析 (自己マーク他者調整)

No	教科書名	著者	出版社	出版年	版	頁	調整デザイン		メモ
							1フレーム	2ネットワーク	
F3-1	生活日本語	文化庁		1983	初	p.281	1・1	2・1	discourseの上に禁煙と書いてある
F3-2	長沼新現代日本語II	言語文化研究所	言語文化研究所	1991		p.123	1・1	2・1	
F3-3	日本語でビジネス会話中級編	日米会話学院日本語研究所	凡人社	1987		p.7	1・2	2・1	
F3-4	日本語でビジネス会話初級編-生活とビジネス	日米会話学院日本語研究所	凡人社	1989		p.183	1・2	2・1	
F3-5	Communication Japanese Style III	言語文化研究所	言語文化研究所	1989		p.47	1・1	2・1	
F3-6	Communication Japanese Style III	言語文化研究所	言語文化研究所	1989		p.55	1・1	2・1	
F3-7	日本を話そう15のテーマで学ぶ日本事情	日鉄ヒューマンでデパロップメント/日本外国語専門学校	The Japan Times	1994	初2刷	p.110	1・1	2・1	接触場面
F3-8	文化中級日本語II	福田由美、三国純子、小山真理、池田優子、阿部祐子、角田浩美	文化外国語専門学校	1997	初	p.35	1・1	2・1	接触場面、NNSは自分の使用語彙に自信がなく、確認。
F3-9	日本でくらす人の日本語I	大谷まこと、関恵美子、田中和佳子 他	にほんごの会企業組合	1997	初	p.110	1・2	2・1	接触場面
F3-10	SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Volume One: DRILLS	筑波ランゲージグループ	凡人社	1991	初	p.14	1・1	2・1	
F3-11	インタラクティブ・ジャパニーズ1 INTERACTIVE JAPANESE 1	友田多香子 プライアン・メイ	講談社インターナショナル	1996	初	p.218	1・1	2・1	接触場面
F3-12	ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE: INTERCULTURAL COMMUNICATION volume 1 two 初級実践日本語2	日暮新子	アルク	1999	初	p.5	1・2	2・1	

表3 教科書会話ディスコース分析 (他者マーカー他者調整)

No	教科書名	著者	出版社	出版年	版	頁	調整デザイン 1フレーム 2ネット ワーク	メモ
f2-1	日本語—はじめまして—	東京外国語専門学校 日本語科 初級教材編集委員	(発行) 東京外国語専門学校 (発売) 凡人社	1994	初	p.151	1・1 2・1	接触場面、ただしNS側の理解のための調整。
f2-2	JAPANESE FOR EVERYONE	長柄 他	学研	1990	初	p.258	1・1 2・1	接触場面、ただしNS側の理解のための調整。
f2-3	ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE: INTERCULTURAL COMMUNICATION volume Two 初級実践日本語2	日暮嘉子	アルク	1999	初	p.286	1・1 2・2	接触場面、ただしNS側の理解のための調整。
f2-4	ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE: INTERCULTURAL COMMUNICATION volume Two 初級実践日本語2	日暮嘉子	アルク	1999	初	p.287	1・1 2・1	接触場面ではない
f2-5	ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE: INTERCULTURAL COMMUNICATION volume Two 初級実践日本語2	日暮嘉子	アルク	1999	初	p.360	1・1 2・2	接触場面、ただしNS側の理解のための調整。
f2-6	日本語 KAIWABOOK 初級3 (Conversacao em Japones ETAPA3)	Akiko Kurihara Watanabe, Alice Sanae Tsuchiya/Yosikumi Shirai	linjo Instituto Cultural (仁恕学院)	1995		p.35	1・1 2・1	接触場面、NNSの書いたものをNSがマークし調整。
f2-7	ロールプレイで学ぶ会話(1) こんなとき何と言いますか	岡崎志津子、小西正子、藤野篤子、松共治子、松永雅子	凡人社	1987	初?	p.152, 153	1・1 2・1	「コミュニケーションギャップが生じた時」というタイトルで、まとめて提示、ダイアログではない。
f2-8	なめらか日本語会話	富阪啓子	(株) アルク	1997	初?	p.34	1・1 2・1	NS-NSのディスコース
f2-9	日本を話そう15のテーマで学ぶ日本事情	日鉄ヒューマンでデベロップメント / 日本外国語専門学校	The Japan Times	1994	初	p.118	1・1 2・2	NNSの自己調整、不適切さの調節ではない。

表4 教科書会話ディスコース分析 (自己マーカー自己調整)

No	教科書名	著者	出版社	出版年	版	頁	調整デザイン 1フレーム 2ネット ワーク	メモ
f4-1	日本語—はじめまして—	東京外国語専門学校 日本語科 初級教材編集委員	(発行) 東京外国語専門学校 (発売) 凡人社	1994	初	p.104	1・2 2・1	接触場面、NS「かつお節でだしをとる」→NNS:RC→NS:自己調整+「かつお節は魚で作ります。」(自、自)
f4-2								

次に、教科書に現れた実際のディスコースを例示する。

表5 教科書会話ディスコース分析（他者マーク自己調整）一部掲載

No.		頁	調整 モデル	フレ ーム	ネット ワーク
f1-1	日本語 KAIWABOOK 初級1 (Convers ao em Japones) おきやく：すみません、これはなんですか。 てんいん：ああ、それはボールペンですよ。 おきやく：ボールペン。 てんいん：ええ、あたらしいボールペンですよ。にほんせいでしょよ。 おきやく：そうですか。いくらですか。 てんいん：2ドルです。 おきやく：じゃあ、このボールペンとえんぴつをください。 てんいん：ありがとうございます。	p.33	他 (RC) 自	単純	二人
f1-2	横山さんの日本語6 一郎：ホン君、おなかすいた。 ホン：うん、べこべこだよ。これだけ勉強すると、おなかがすくんだね。 一郎：じゃあ、出前でも取ろうか。 ホン：えっ出前って何？ 一郎：中華、すし、そばなんか、家に届けてもらえるんだ。何食べる。 ホン：うーん何にしようかな。	p.58	他 (RC) 自	単純	二人
f1-3	横山さんの日本語5 マイケル：俊夫くん、おはよう。あれ、今日はいつもと違って半そでのワイシャツだね。制服なのに上着を着ていなくていいのかい。 俊夫：うん、そうなんだ。毎年6月1日になったら夏の制服に替わることになっていくんだよ。衣替えていってね。 マイケル：えっ、衣替え。衣替えて何だい。 俊夫：季節の変わり目に夏服に切り替えることなんだ。駅やデパートに行けば、駅員や店員も、今日から夏服に衣替えしているはずだよ。 マイケル：なるほどね。季節が変われば制服も替わるのか。日本の習慣は面白いね。 俊夫：うん。梅雨が終わって7月になれば、家の中も夏用のものに替わっていくんだよ。 マイケル：なるほど。そうなのか。ところでいつ冬服になるの。 俊夫：10月1日になれば、また昨日まで着ていた冬服に戻るんだよ。 マイケル：じゃあ、今度みんなが冬服を着ているのを見たら、秋になったりというわけか。	p.74	他 (RC) 自		二人
f1-4	新編高級日本語会話 チン：保証人の息子さんが結婚することになり、はくも結婚式に招待されたんですけど、初めての経験だからわからないことだらけなんです。いろいろ教えていただけませんか。 純子：ええ、いいわよ。私に分かることなら何でもどうぞ。 チン：ありがとうございます。助かります。まず最初に、お祝いのことですが、どうすればいいでしょうか。 純子：そうですね。たいていは、お金をご祝儀袋に入れて、式場に行って受付で記名して渡します。でも、あとでプレゼントの品を送ってもいいんじゃないかしら。 チン：ご祝儀袋ってなんですか。 純子：おめでたいことがあるときに、お祝い金を入れる袋なの。白地に赤や金色の水引が付いた紙の袋。お葬式の時は、不祝儀袋として白地に黒い水引の模様があります。 チン：どこで売っていますか。 純子：文房具屋さんには必ずあります。最近では、どこのスーパーマーケットでも売っているはずよ。 チン：あ、お金はいくらぐらいいいればいいでしょうか。 純子：そうですね、チンさんは学生だから、1万円くらいでいいんじゃないかしら。 それはそうと、結婚式はいつですか。 チン：6月15日、日曜日、午後2時からです。 純子：場所は？ チン：ホテルの結婚式場です。それから、当日は何を着て行けばいいのでしょうか。	p.93	他 (RC) 自	単純	二人
f1-35	日本を話そう15のテーマで学ぶ日本事情 鈴木婦人：今日は姫の結婚式だったんですけど、わたしたちが姫にお婿さんになった男性を紹介したんですよ。 鈴木氏：お見合いは今年の初めだったなあ。 テレサ：お見合いって。 鈴木婦人：仲人っていう紹介役が、結婚を希望する男女を、食事などしながら紹介するんです。二人のご両親が同席することもありますね。で、二人とも	p.12	他 (RC) 自	単純	マルチ参加

表 6 教科書会話ディスコース分析 (自己マーク他者調整) 一部掲載

No.		頁	調整 モデル	フレ ーム	ネット ワーク
f3-1	生活日本語 [会話1] 仕事を探す 林さんが、新聞の求人欄で仕事を探しています。友人の鈴木さんに読み方を聞きます。 1 林 : 鈴木さん、わたしも そろそろ 働こうかと 思っているんです 2 鈴木 : それは いいですね。もう 日本語も だいじょうぶでしょう。 3 林 : どうやって 仕事を見つければ いいんでしょう。 4 鈴木 : そうですね。新聞の求人欄とか、職業安定所とかで 探すんでしょうね。ちょっと新聞 見てみましょうか。 5 林 : はい。 6 鈴木 : 中高年、男、68歳まで、時給500円か。これはどうかな。 7 林 : この「歴持参委細面」というのは何ですか。 8 鈴木 : ああ、これはね、面接を して、いろいろなことを 決めるってことですね。そのときに 履歴書を もってきなさいってことですよ。	p.281			
f3-2	長沼新現代日本語II ヤング「この漢字はさっきの駐車禁止の禁と同じ字ですね。これはどういう意味ですか。 秋 山「これは「きんえん」と読んで、ここでたばこを吸ってはいけな」ということです。」	p.123			
f3-3	日本語でビジネス会話中級編 5. 漢字の発音 A 貿易の「貿」は長いですか。 B 長いですよ。「ボウ」です。 A 「ボ」ですか。それとも「ポ」ですか。 B てんでんですよ。	p.7			
f3-4	日本語でビジネス会話初級編—生活とビジネス ナンシー おはようございます。 大家 ああ、ナンシーさん、お出かけですか。 ナンシー ええ、銀行へ水道料金を払いに行こうと思っているんです。それで、すみませんがちょっとわからないことがあるので、教えてくださいませんか。 大家 何ですか。 ナンシー これは水道料金の納入通知書なんですが、ここに「便利な何をご利用ください」と書いてあるんですか。 大家 口座振替ですよ。 ナンシー こうざふりかえ。 大家 ええ、口座振替にすると、銀行があなたのかわりに口座から料金を払ってくれるんですよ。 ナンシー それは便利ですね。では、銀行へ行ったら、ついでに手続きをしようと思えます。手続きをするには何を持って行った方がいいんですか。 大家 通帳と印かんと納入通知書が必要です。 1人でだいじょうぶですか。 ナンシー ええ。このごろ日本人の話すことが少しわかるようになったので…。	p.183			
f3-5	Communication Japanese Style III 青木 そうなんですよ。予想では、21世紀の初めには、日本人の5人に1人は老人だという時代が来るといわれているんですよ。 マイヤー 老人の割合が多くなれば、いろいろの問題が起こってくるでしょうねえ。例えば、ね、ねん、何といいましたっけ。ほら、年を取ってからもらうお金のこと。 青木 ああ、年金ですか。 マイヤー そう、それです。年金です。老人が増えれば、若い人の負担が大きくなるわけでしょう。	p.47			
f3-6	Communication Japanese Style III 市川 日本はまあまあ経済的に豊かになったし、平和は続いているし、結局政治に関心のない人が多いんですよ。 スミス 意味がよく分からないんですが、かんしんってどういう漢字ですか。感じがするの「感」に、「心」という字ですか。 市川 その感心じゃなくて、関係の「関」に、「心」という字ですよ。	p.55			
f3-7	日本を話そう15のテーマで学ぶ日本事情 隆 : 何を見ているんですか。ジャラルさん。 ジャラル : あ、おはようございます。あの車、アベ、アベ、って何度も。 隆 : ああ、選挙カーですよ。今日から選挙戦が始まりましたから、候補者の名前を叫んでいるんです。 ジャラル : そうか。選挙のことは、このごろ毎日、テレビで言っていますね。サンギ…何でしたっけ。 隆 : 参議院です。日本の国会には衆議院と参議院の二つがあるんです。ほら、あそこに候補者のポスターもはってありますよ。 ジャラル : いろんな人が立候補していますね。日本の選挙のことをもう少し話してもらえませんか。	p.110	自他 (RA)	単純	二人
f3-8	文化中級日本語II I (インタビュー) : ところで、あのう、今はホテルにお勤めだと何々なんですが、きっかけは…。 B (バスケスさん) : あの、パーティーで友達が今のホテルのマネージャーを紹介してくれたんです。	p.35			

表7 教科書会話ディスコース分析（他者マーク他者調整）一部掲載

No.		頁	調整 モデル	フレ ーム	ネット ワーク
f2-1	日本語—はじめまして— アルン：すみません、現代美術館に行きたいんですが…。 たばこ屋：ああ、去年できた美術館ですね。…今のバスで来たんですか。 アルン：ええ。 たばこ屋：美術館は、次の停留所の方が近いんですよ。 アルン：えっ、そうですか…。	p.151	他他	単純	二人
f2-2	JAPANESE FOR EVERYONE バーバラ：おくさん、ちょっと、お聞きしたいことがあるんですけど。 田辺夫人：はい、何でしょう。 バーバラ：こんなものが、ゆうびんで来たんですけど。これ、何でしょう。 田辺夫人：ああ、電気代のせいきゅうですよ。 バーバラ：電気代？ ああ、電気料金ですか。 あ、これ、どこではらえばいいんですか。 田辺夫人：近くの銀行ではらえば、いいですよ。	p.258	他・他	単純	二人
f2-3	ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE：INTERCULTURAL COMMUNICATION volume Two 初級実践日本語2 母：ベスさんは、どんな初ゆめを見ましたか。 ベス：初ゆめ、ですか。 絵里子：元日の夜に見るゆめのことを、初ゆめというのよ。 ベス：えーっと、あ、ゆめは見ませんでした。 絵里子：わたし、いいゆめ、見たんだ。今年は、よい年になりそうだよ	p.286	他1 (RC) 他2	単純	マルチ
f2-4	ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE：INTERCULTURAL COMMUNICATION volume Two 初級実践日本語2 直人：行ってまいりませう。 絵里子：直人、木刀持って、どこ行くの。学校は、まだお休みでしょ。 直人：お姉ちゃん、これは「竹刀」だよ。	p.287	他・他	単純	二人
f2-5	ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE：INTERCULTURAL COMMUNICATION volume Two 初級実践日本語2 母：9度もあるわ。 ベス：9度？ 絵里子：せつし39度のことよ。かきに直すと、そうねえ、お母さん、計算きあるかしら。 ええっと、……、102.2度だよ。 ベス：ええっ、そんなに。 母：大学病院へいって(い)らっしゃい。絵里子、ついて行ってあげなさい。 タクシー呼んであげるから。あら、はやぶさタクシーの番号が見当たらないわ。 直人、104に電話して、聞いて。	p.360	他1 (RC) 他2	単純	マルチ
f2-6	日本語 KAIWABOOK 初級3 (Conversacao em Japonês ETAPA3) 2. にしかわいいんで マリオ：すみません、はじめてですか。 かんごふ：じゃあ、この ようしに おなまえ、ごじゅうしょ、でんわばんごうを かいてください。 マリオ：すみません、日本ごは かけません。 かんごふ：ローマじで かいてもいいですよ。 マリオ：はい、わかりました。これで いいですか。 かんごふ：せいねん月日は うまれた 日です。きょうの 日づけでは ありません。なおしてください。 マリオ：はい、わかりました。これでいいですか。	p.35	他他	単純	二人
f2-7	ロールプレイで学ぶ会話(1) こんなどき何と言いますか ○医者：この錠剤は毎食後、こちらの抗生物質は6時間ごとに飲んでください。 リー：あのう、ちょっとはっきりしないんですが、つまり、これは食後、このカプセルは6時間ごとに飲めばいいんですか。 医者：そうです。 ○得意先：すみません、おことづけをお願いしたいんですが。 カイト：はい。 得意先：明日午後1時に課長さんに来ていただくことになってたんですが、わたくし、ちょっと急用ができてその時間出ておるものですか、明後日の同じ時間をお願いしたいと。 カイト：はい。ちょっと確かめたいんですが、あした午後1時のご都合が悪いので、あさっての1時にいらっしゃるんですね。 得意先：はい。	p.152 p.153	他他 他他	単純 単純	二人 二人
f2-8	なめらか日本語会話 息子：お父さん。ほく、彼女と結婚しようと思っているんだ。 父：え？ 彼女って？ 息子：ほら、この前、家に連れてきただろ。あの子だよ。ほくたち、ウィーンで結婚式を あげようと思うんだけど… 父：え？ ウィーンって、オーストリアのウィーンかい？ 息子：そうだよ。ウィーンの教会で二人きりで式をあげるんだ。	p.34	他 (RC) 自 他他(RC)	単純 単純	

表8 教科書会話ディスコース分析 (自己マーク自己調整)

No.		頁	調整 モデル	フレ ーム	ネット ワーク
f4-1	日本語—はじめまして— マリー：作り方を教えてください。難しいですか。 石田：いいえ、簡単です。まず、かつお節でだしを取ります。 マリー：だしですか。 石田：ええ。スープの事です。 かつお節は、魚で作ります。これはスーパーにもありますよ。	p.104	他 (RC) 自 自	複合	二人

4.2 結果及び分析

調査の結果、「他者マーク自己調整」型ディスコースは、37種類の教科書・ドリルで73箇所、「自己マーク他者調整」型ディスコースは、11種類の教科書・ドリルで12箇所、「他者マーク他者調整」型ディスコースは、7種類の教科書・ドリルで9箇所、そして、「自己マーク自己調整」型ディスコースは、1種類の教科書・ドリルで2箇所確認された。この結果から、とくに、「他者マーク自己調整」型と他のディスコースの取り扱い数は大きく異なることがわかる。こうした傾向から、明示的で、学習者にとって意識化しやすいディスコースだけが配列され、作りやすさを基準に、ディスコースが構成されているという教科書の特徴が浮かびあがってくる。以下に、各調整ディスコースの特徴を含む会話ディスコースを列挙する。

しかしながら、実際の接触場面の調整ディスコースは、この頻度順で現れるとはかぎらない。エスノメソドロジーの会話分析派によって、自己調整のフレームワークを提唱し、自己調整は、他者調整よりも社会構造上、好んで使われることが明らかになった (Schegloff *et. al* 1977)。自己調整の特徴として、発話交換が起きる事象関連場 (transition-relevance place) でのターンが行われず (発話者が引き続き発話を続ける) ので、自己調整の構成要素の出現は明確に認識できない。Schwartz は、「発話者は、他の参加者とともに、はっきりと調整過程を認識しているわけではないので、自己調整は、交渉のためのインターアクションの中で、おそらく最も困難な認知カテゴリーであろう」 (Schwartz 1980:141) と記述しているが、今後のさらなる追証課題としなければならない。

例5 他者マーク自己調整 出典筑波ランゲージグループ1991『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Volume One : DRILLS』、凡人社、初版 p.112

f1-65	1. A: ちょっと、すみません。 2. B: はい。 3. A: これ、なんて読むんですか。 4. B: ああ、たつきゅうびんですよ。 5. A: たつきゅうびんですか。 6. B: いいえ。たつきゅうびんです。 7. A: たつきゅうびん。 8. B: いいえ。たつきゅうびんです。 9. A: Long Sound Small 'tsu' がありますか。 10. B: ええ。 11. A: たつきゅうびん。↑ 12. B: ええ、そうです。 13. A: どうも、ありがとう。	p.102	他 (RC) 自 (RC) 自 (RC) 自 (RC) 自	複合	二人
-------	--	-------	---	----	----

RC: Request for Clarification (調整リクエストマーカー 聞き返し)

この教科書ディスコースは、「宅急便」の発音に関する、4つの単純調整（他者マーク自己調整型）の組み合わせ（5.と.6.、7.と8.、9.と10.、11.と12.）からなる複合調整の構造をなしている。

例6 自己マーク他者調整 出典日暮嘉子 1998『ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE: INTERCULTURAL COMMUNICATION volume one 初級実践日本語1』、アルク、初版 p.5

f2-6	1. サイモン：すみません、roll of gauze、ありますか。 2. 店員：なんですか、それ？ 3. サイモン：あのう、日本語でなんて言うかわからないんですけど…。 けがをした時に使う物なんです…。 4. 店員：はあ…？ 5. サイモン：白くて長い布で、こんなふうにかく…。 6. 店員：ああ、ほうたいのことですね。	p.5	自 (RA) 他 自 (RA)	複合	二人
			他 自 他		

RA: Request for Assistance (調整リクエストマーカー) アピールのための、コミュニケーション・ストラテジー (Tarone, Cohen and Drumas 1983)

これも例5と同様に、ある語彙（ガーゼ）を産出するための調整ディスコースであると分析できる。3つの単純調整（自己マーク他者調整型）の組み合わせ（1.と2.、3.と4.、5.と6.）からなる複合調整の構造をなしている。

例7 他者マーク他者調整 出典 Kurihara-Watanabe, A. 他 1995『日本語 KAIWABOOK 初級3 (Conversacao em Japones ETAPA3)』、仁恕学院 p.35

f2-6	2. にしかわいいんで 1. マリオ：すみません、はじめてですが。 2. かんごふ：じゃあ、このようしにおなまえ、ごじゅうしょ、でんわばんごうをかいてください。 3. マリオ：すみません、日本ごはかけません。 5. マリオ：はい、わかりました。これでいいですか。 6. かんごふ：せいねん月日はうまれた日です。きょうの日づけではありません。なおしてください。 7. マリオ：はい、わかりました。これでいいですか。	p.35			
			他他	複合	二人

このディスコースでは、6.を他者マーク他者調整と判定した。日本語母語話者である看護婦が、マリオの逸脱をマークし、side-sequenceに入らずに、調整ストラテジーを使った例である。

例8 自己マーク自己調整 出典 東京外国語専門学校 日本語科 初級教材編集委員 1994『日本語—はじめまして—』、凡人社、初版 p.104

f4-1	日本語—はじめまして— 1. マリー：作り方を教えてください。難しいですか。 2. 石田：いいえ、簡単です。まず、かつお節でだしを取ります。 3. マリー：だしですか。 4. 石田：ええ。スープのことです。 かつお節は、魚で作ります。これはスーパーにもありますよ。	p.104	他 (RC) 自 自	複合	二人
------	---	-------	------------------	----	----

3. で、非母語話者が、調整リクエストマーカである、聞き返しのストラテジーを使い、母語話者に説明を求めている。それを受けて、4. では、英語にパラフレーズしたが、かつお節についても、説明すべきだと判断 (自己マーク) し、作り方と入手先に関する情報を提供することで、自己調整した。

5. ACTFL OPI のインタビュー・ディスコースと調整行動

以上の結果、日本語教科書に採用されている会話ディスコースは、調整行動を十分応用した編集にはなっていないことが明らかになった。また、たとえ採用された場合でも、明示的な調整が主で、偏りがあることも検証された。だが、調整行動についての重要性が、依然十分に認識されていないのは、教科書談話だけではなく、会話運用能力を判定するベンチマーク (基準) にも反映されていない。ここで、コミュニケーション能力を図る、全米外国語教育協会 (The American Council on Teaching of Foreign Language: ACTFL) によって開発された会話能力テストである、The Oral Proficiency Interview (OPI) を例に考察することにする。

OPI は、外国語学習者の会話のタスク達成能力を、一般的な能力基準を参照しながら対面のインタビュー方式で判定するテストである。試験官である OPI テスターは、会話運用能力の下限 (被験者が一貫して維持できる言語運用能力の最高レベル) と上限 (被験者が種々の異なる話題を通してこれ以上言語運用を維持できなくなってしまうレベル、突き上げ (Probes) を決めてレベルチェック (Level Check) と呼ばれる判定を行う役割が課せられているが、どのように挫折 (linguistic breakdown) を起こさせるか、またそのような問題をどのように解決するかといった能力を判定することが期待されている (牧野 1991)。そのテスターによって、超級と判定された話者は、どのような技能保持者であろうか。『ACTFL 言語運用能力基準-話技能 (1986)』によれば、話者は、ターンのコントロール、高低・強勢アクセント、語調、適切な文構造および語彙を用いて、中心となる主張とそれを裏付ける情報を話し分ける。また、会話ストラテジーや談話管理ストラテジーも使いこなせる、とあるが、次に挙げる、ある被験者とのインタビューコーパスを、調整行動の観点から分析してみよう。

プリンストン大学のインタビュー実験データ (1996年5月, 1995年10月収録一部掲載)
<http://www.env.kitakyu-u.ac.jp/corpus/jdocs/intro.html> より抜粋

(NS: Native Speaker of Japanese, NNS: Non-Native Speaker of Japanese)

1. NS : メーン州ってどういう所ですか、教えてください。
2. NNS³ : ああ、どういふところ。(NS: うん。) あの、ああー、アメリカには、一番な、東な州です。ああ、メーン州には、あの、ああ、ダイジゼンが多いです。
- 3. NS : 何が多い。
- 4. NNS : ジダイセン。
- 5. NS : ジダイセン。

- 6. NNS : うう、ジゼン。
- 7. NS : ジゼン。
- 8. NNS : ジゼン、ネイチャア。
- 9. NS : ネイチャアも分からない。ははは。

この接触場面ディスコースは、4回の単純調整（他者マーク自己調整）が連続して続く、複合型調整の意味交渉である。3.で、日本語母語話者であるNS（テスター）が、聞き手による他者マークに相当する「聞き返し」ストラテジーを使い、それに対し、4.で繰り返しのストラテジーを使い、話し手である被験者（NNS）が自己調整を試みている。しかしながら、このテスターは、再度「突き上げ」をするために、2度目の他者マーク（5.）をし、相手の調整を求めているが、再び、6.の調整について留意したために、7.でまた聞き返しのストラテジーを使っている。NNSは、8.で、英語にパラフレーズするも、9.では、NSが非協力的な態度を継続しながら、理解を拒絶し、会話運用能力の上限を見極めようとしている。ディスコースから類推するに、テスターは、自然な接触場面において、3.のような状況では、「何が多い。」というディスコースの代わりに、「ああ、大自然ね、はい、はい、わかりました」などと、recastsを応用したのではないだろうか。

さらに、調整行動とは別に、レベルチェックによる突き上げによって挫折を生じさせたこのディスコースから、何が読み取れるであろうか。まず、Grice (1975) が指摘する、協調の原理 (the Cooperative Principle) に反する、実際使用場面では起こりにくいディスコースの特性が形成されていると判断できる。協調の原理では、4つの公理に基づき、会話は、話し手と聞き手が、互いに協調的であるという原則に基づいて構成され、ディスコースで使われる意味は、参加者相互の共通知識によって決まる、とされている。4つの公理とは、適当な量の情報を提供する、量の公理 (the maxim of Quantity)、虚偽で不十分な情報を提供しない、質の公理 (the maxim of Quality)、無関係なことをいわない、関連性の公理 (the maxim of Relevance)、そして、明晰な陳述をする作法 (様態) の公理 (the maxim of Manner) を指す。インターアクションによって、接触場面の参加者に何を伝達すべきかは今後重要な考察になりうる。単なる意味交渉能力の上限、下限による会話運用能力の伝達だけではなく、プラグマティクス (語用論) 的な能力や、他者とのインターアクションを通して自己実現するプロセスや、自らのアイデンティティを、自分のことばで過不足なく正確に相手に伝える能力を、どのように判定すべきかは、重要な検討事項になりうるのではないだろうか。

再び、調整行動の観点から DPI を考察してみよう。超級、上級、中級、初級という4つの主要な発話標本のレベルの評定に関して、1 機能・タスク、2 場面・内容、3 正確さ、4 テキスト・談話の型という4つの基準を設けているが、調整行動に焦点を当てたものではない。また、他の参加者とのインターアクションによって、コミュニケーション問題を調整していく能力を、評価の中心基準ともしていない。例えば、「他者マーク自己調整」の調整パターンについては、極端なまでに使われているが、一方、「自己マーク他者調整」、さらには、暗示的な調整パターンである、「他者マーク他者調整」、「自己マーク自己調整」

などは評価の対象になっていない。特定の調整行動に特化すると、学習者は、母語話者の調整行動のバリエーションに気づきにくくなる恐れがある。そうした意味で、OPI でデザインされたインタビューは、実際使用場面（ネウストブニー 2002）での必要な調整行動能力が十分に配慮されていない、偏りがちな会話能力判定テストと判断せざるをえない。今後の改良点として、例えば、意味交渉過程で、テスターに recasts を使わせた場合、コミュニケーションの維持能力に欠けるといった評価項目などを導入してもいいのではないだろうか。

6. 言語習得を目指した教科書談話

これまでの談話分析の検証から、日本語会話ディスコースでは、調整行動への関心が低く、導入されていても採用に偏重が見られ、「他者マーク自己調整」型の明示的な調整行動が圧倒的に多く、暗示的な「他者マーク他者調整」や、「自己マーク自己調整」型調整パターンは、ほとんど作例されていないことが明らかになった。今後は、文法や文型、語彙の導入などに主眼をおいたディスコースの導入だけではなく、調整パターンについてもシステマティックにデザインされる必要がある。

これからの教科書開発に向けて、接触場面の参加者である学習者や教師が留意しなければならないこと、さらには第二言語習得研究に携わる関係者の、調整ディスコース研究に向けたさらなる意識化について、以下のような提言が可能ではないだろうか。

- 1 日本語教育の目標は、ことばを生成するプロセスと同様に、管理するプロセスへの関心を高めるように意識化すること。
- 2 あらゆる調整行動パターンの特徴を意識化するリクエストマーカを伴った、明示的、顕在的な調整行動「他者マーク自己調整」、「自己マーク他者調整」だけでなく、暗示的、隠在的な不適切マーカ（不完全発話、間投語、問題が発生した箇所の繰り返し、ポーズなど）やサポートマーカを伴った調整行動「他者マーク他者調整」、さらには、発話交換が起きる事象関連場でのターンが行われず、調整プロセスが見えにくい「自己マーク自己調整」型の調整パターンも習得対象として意識する。

- 3 教室以外の接触場面での調整行動を、社会的文脈との関連で考察させるための、ストラテジー・トレーニングを導入する。

学習者は、教科書談話、教室談話をモニターする能力（メタ認知ストラテジー）を習得するとともに、接触場面で起きる全ての調整行動に注目し、教科書で採用されている調整ディスコースとの整合性を問い直す。教室場面と、それ以外の接触場面で観察できる調整行動の違いに注目し、社会的文脈と調整行動の相関関係にも留意する必要がある。

- 4 調整行動を習得させる意義を、教師にも意識化させる教師側も、調整行動という視点を養い、教科書会話ディスコースから学びとれること、とれないことを、学習者に教示するとともに、さまざまな調整ディスコースのパターンを、教室場面でも明示できる工夫をする。調整行動は、化石化した学習者のインターアクション能力（中間言語）を、再び習得プロセスに戻す働きをする。
- 5 モデルディスコースから問題を含むディスコースへの発想の転換
これまでの日本語教科書の会話では、モデルとなるディスコースを提示し、それを認知、記憶させるという方法が採られてきた。だが、こうした方針は、ディスコースに内在する暗示的、陰在的な問題を分析する能力が十分養えない。教科書会話ディスコースでは、コミュニケーション問題やインターアクション問題を含むディスコースも積極的に提示し、調整能力を習得させるという発想の転換を図るべきである。
- 6 教科書の談話分析研究を、さらに発展させるために、調整行動の面から再構築する教科書会話ディスコース分析は、談話習得研究の一部であるが、今後の談話研究を、接触場面における談話研究、とくに、調整ディスコース研究にシフトさせる必要がある。

注

- 1 本稿で扱う「教科書」は、広くリソース、教材なども含まれることを断っておく。
- 2 長友、小柳などは、自然習得を、「教室習得とは異なる習得」だと捉えているが、教室の内・外という分けとは別の次元であることを理解する必要がある（宮崎 2005）。
- 3 NNS は、プリンストン大学に在学し、東洋学を専攻する 1 年生で、英語を母語とする 20 代の男性。日本滞在歴は、2 ヶ月。

参考文献

- Braidi, S. 2002 Reexamining the role of recasts in native-speaker/non-native speaker interactions, *Language Learning*, vol.52, no.1, pp.1-42
- Doughty, C., and Valela, E. 1998 Communicative focus on form. In C. Doughty & J. Williams (Eds.) *Focus on form in classroom Second Language Acquisition* pp.114-138. New York: Cambridge University Press.
- Doughty, C. and M. Long (eds.) 2003 *The Handbook of Second Language Acquisition*, Blackwell
- Ellis, R. 1999 Item versus system learning: Explaining free variation. *Applied Linguistics*, vol.20, no.4, pp.460-480
- Ellis, R. 2002 Does form-focused instruction affect the acquisition of implicit knowledge?: A review of the research, *Studies in Second Language Acquisition*, vol.24, no.2, pp.223-236
- Ellis, R. 2004 The definition and measurement of L2 explicit knowledge, *Language Learning*, vol.54, no.2, pp.227-275
- Gass, S. and E. Varonis. 1985 Task variation and non native/non native negotiation of meaning. In S. Gass and C. Madden. (eds.). *Input in Second Language Acquisition*. Rowley, Mass.: Newbury House. pp.149-161.
- Grice, H. P. 1975. Logic and conversation. In P. Cole (ed.) *Syntax and Semantics*. Vol. 3. New York: Academic Press. pp.41-58.

- Jefferson, G. 1972 Side sequences. In D. Sudnow. (ed.). *Studies in Social Interaction*. New York: Free Press. pp.294-338.
- 上村隆一 北九州市立大学国際環境工学部情報メディア工学科上村隆一研究室、インタビュー形式による日本語会話データベース <http://www.env.kitakyu-u.ac.jp/corpus/jdocs/intro.html>
- 小柳かおる 2005 「教室の外の実践につなぐ効果的な教室指導のあり方：第二言語習得の認知心理学からの考察」、特集自然習得による日本語学習『日本語学』、明治書院、20-30 頁
- Krashen, S. 1981 *Second Language Acquisition and Second Language Learning*. Oxford: Pergamon Press
- Krashen, S. 1985 *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. London: Longman. Newbury House. pp.87-93.
- Lyster, R. 1998 Recasts, repetition, and ambiguity in L2 classroom discourse, *Studies in Second Language Acquisition*, vol.20, pp.51-81.
- 牧野成一 (1991) 「ACTFLの外国語能力基準およびそれに基づく会話能力テストの理念と問題」、『世界の日本語教育』、1号、15-32 頁、国際交流基金日本語国際センター
- 宮崎里司 1990 「接触場面における仲介訂正ネットワーク」、『日本語教育』、71号 171-181 頁
- 宮崎里司 1991 「日本語教育と敬語：主として敬語回避の観点から」、『世界の日本語教育』、1号、91-103 頁
- 宮崎里司 1998 「第二言語習得理論における調整、意味交渉及びインプット」、『紀要』、No.11、177-190 頁、早稲田大学日本語研究教育センター
- 宮崎里司 1999 「接触場面でのコミュニケーション調整とそのディスコースパターン：自己マーク自己調整を中心として」、『早稲田日本語研究』、7号、早稲田大学国語学会、65-76 頁、ひつじ書房
- Miyazaki, S. 2000 Communicative adjustment and adjustment marker: The point of request for clarification, 『第二言語としての日本語の習得研究』、vol.3, pp.57-93、第二言語習得研究会
- Miyazaki, S. 2001 Theoretical framework of communicative adjustment in language acquisition, *Journal of Asian Pacific Communication*, vol.1, no.1 pp.40-60
- 宮崎里司 2005 「言語の自然習得とは」、特集自然習得による日本語学習、『日本語学』、明治書院、6-18 頁
- 長友和彦 1996 「第二言語習得における顕在的知識 (explicit knowledge) と陰在的知識 (implicit knowledge) —インターフェイス・ポジション構造シラバスに示唆するもの」、『細田和雅先生退官記念論文集 日本語の教育と研究』、淡水社、189-200 頁
- 長友和彦 2005 「第二言語習得としての日本語の自然習得の可能性と限界」、特集自然習得による日本語学習『日本語学』、明治書院、32-43 頁
- Neustupný, J.V. 1985 Language norms in Australian-Japanese contact situations. *Australia, Meeting Place of Languages*. In M. Clyne. (ed.). Canberra: Pacific Linguistics. pp.161-170.
- ネウストプニー、J.V. 2002 「インターアクションと日本語教育—今何が求められているか」、『日本語教育』112号、1-14 頁
- Norris, J. and L. Ortega 2000 Effectiveness of L2 instruction: A research synthesis and quantitative meta-analysis, *Language Learning*, vol.50, no.3, pp.417-528
- Ozaki, A. 1989. *Requests for Clarification in Conversation between Japanese and Non Japanese*. Canberra: Pacific Linguistics.
- Schegloff, E.A., G. Jefferson and H.E. Sacks. 1977 The preference for self correction in the organization of repair in conversation., *Language*. vol.53. no.2. pp.361 382.
- Schwartz, J. 1980 The negotiation for meaning: Repair in conversations between second language learners of English. In D. Larsen Freeman. (ed.). *Discourse Analysis in Second Language Research*. Rowley. Mass.: Newbury House. pp.138 153.
- Swain, M. 1985 Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In S. Gass and C. Madden. (eds.). *Input in Second Language Acquisition*. Rowley. Mass.: Newbury House. pp.235 253.
- Tarone, E., A. Cohen and G. Drumas. 1983 A closer look at some interlanguage terminology: A framework for communication strategies. In C. Faerch and G. Kasper. (eds.). *Strategies in*

Interlanguage Communication. London: Longman, pp.4-14.

教科書一覧

- 文化庁 1983 『生活日本語』、文化庁、初版
 福田由美他 1997 『文化中級日本語Ⅱ』、文化外国語専門学校、初版
 言語文化研究所 1988 『長沼新現代日本語Ⅰ』、言語文化研究所
 言語文化研究所 1989 『Communication Japanese Style Ⅲ』、言語文化研究所
 言語文化研究所 1991 『長沼新現代日本語Ⅱ』、言語文化研究所
 言語文化研究所 1999 『Japanese for beginners in 25 Situations - ながぬま 25』、言語文化研究所、初版
 日暮嘉子 1998 『ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE :INTERCULTURAL COMMUNICATION volume one 初級実践日本語 1』、アルク、初版
 日暮嘉子 1999 『ELEMENTARY FUNCTIONAL JAPANESE :INTERCULTURAL COMMUNICATION volume Two 初級実践日本語 2』、アルク、初版
 今井純子他 1997 『ナレースワン大学日本語会話』、ナレースワン大学人文社会学部日本語科、初版
 自治体国際化協会 1995 『Japanese for JETs Intermediate Text』、初版
 国際学友会日本語学校 1994 『留学生の日本語会話』、国際学友会日本語学校、3版
 国際日本語普及協会 1998 『ヤングのための日本語Ⅰ JAPANESE FOR YOUNG PEOPLEⅠ』、講談社
 インターナショナル、初版
 Kurihara-Watanabe, A. 他 1995 『日本語 KAIWABOOK 初級 1 (Conversao em Japones)』、仁恕学院
 Kurihara-Watanabe, A. 他 1995 『日本語 KAIWABOOK 初級 3 (Conversacao em Japones ETAPA3)』、仁恕学院
 松下孝子・叶綺 1988 『新編高級日本語会話』、清華大学出版社、初版
 名柄進他 1990 『JAPANESE FOR EVERYONE』、学研、初版
 日米会話学院日本語研修所 1987 『日本語でビジネス会話中級編』、凡人社
 日米会話学院日本語研修所 1989 『日本語でビジネス会話初級編：生活とビジネス』、凡人社
 日鉄ヒューマンでデベロップメント／日本外国語専門学校 1994 『日本を話そう 15 のテーマで学ぶ日本事情』、The Japan Times、初版
 能登博義 1992 『Communicating in Japanese コミュニケーションのための日本語入門』、創拓社、初版
 岡崎志津子他 1987 『ロールプレイで学ぶ会話 (1) こんなとき何といえますか』、凡人社、初版
 大谷まこと他 1997 『日本でくらす人の日本語Ⅰ』、にほんごの会 企業組合、初版
 大坪一夫他 1983 『A COURSE IN MODERN JAPANESE VOLUME ONE』、名古屋大学出版会
 清ルミ 1994 『CRASH COURSE JAPANESE BUSINESS ビジネス日本語速習コース』、アルク、初版
 高柳和子他 1991 『初級日本語テキスト 日本語で話そう③人間関係とコミュニケーション』、英語教育協議会、初版
 高柳和子他 1993 『日本語会話中級Ⅰ』、凡人社
 谷口すみ子他 1995 『日本語入門 はじめのいっぽ First Steps in Japanese』、スリーエーネットワーク、初版
 友田多香子、ブライアン・メイ 1996 『インタラクティブ・ジャパニーズ 1 INTERACTIVE JAPANESE 1』、講談社インターナショナル、初版
 富阪容子 1997 『なめらか日本語会話』、アルク、初版
 東京外国語大学 留学生日本語教育センター 1995 『初級日本語かいわ』、凡人社、新装版
 東京外国語専門学校 日本語科 初級教材編集委員 1994 『日本語 - はじめまして -』、凡人社、初版
 筑波ランゲージグループ 1991 『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Volume One : DRILLS』、凡人社、初版
 横山信子 1992 『見て、きいて、わかる実践日本語会話』、三修社、初版
 横山信子 1989 『「見て きいて わかる横山さんの日本語 6』、日本語教育センター、初版

資料 1

日本語教科書 会話ディスコース分析 カバーシート

担当者： _____

日 付： _____

教科書名： _____

著 者： _____

出 版 社： _____

出 版 年： _____

第 ? 版： _____

頁： _____

調整タイプ

- 1 他者マーク自己調整 (理解のための調整)
- 2 他者マーク他者調整 (理解のための調整)
- 3 自己マーク他者調整 (表出のための調整)
- 4 自己マーク自己調整 (表出のための調整)

調整デザイン

- 1 フレームデザイン 2 ネットワークデザイン
 - 1-1 単純調整 2-1 二人調整
 - 1-2 複合調整 2-2 マルチ参加者調整

メモ (e.g., 調整ディスコースが使われた理由、接触場面のディスコースになっているかなど)
